

カトマンズの青春

(インドからネパールへ)

黒崎たかし

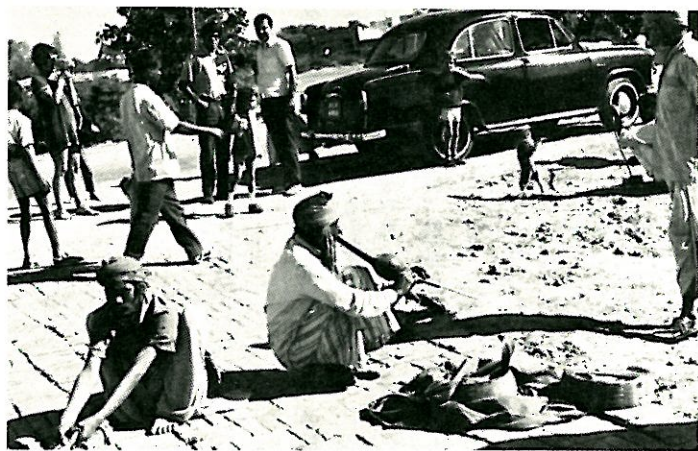


### 死の街・聖地ベナレス

急行とは名ばかりの列車がガンジス河を渡ると、ベナレスである。ベナレスの名を耳にしたことのない方もおありと思う。メッカと言えはほとんどの方はおわかりだろう。メッカが回教徒の聖地であるように、ベナレスはヒンドゥ教徒の聖地である。

ベナレスの駅は、聖地の駅にふさわしくなく貧相である。ボクの乗っていた車両から降りた外国人は五人。ボクの他には、テヘラン以来のパートナーであるスイス人のピーターとマティス、そしてフランス人が二人。このフランス人とはベナレスの駅でバイバイである。

陸橋を渡り、コンコースへ出た瞬間、驚いたのなんの。「バクシーシ」。「バクシーシ」の連続である。デリーやアグラでも非常に多くの乞食がいたが、ここはその倍以上もいるではないか。インドの乞食は早起きなのだろうか。朝寝坊のボクは、早起きの乞食を見て、



アグラへの道中にて

「十パイサ位くれてやってもいいんじゃないかな」と仏心を出す。しかし、一人にくれてやってみろ、次から次へと、我も我もと乞食の行列が出来るにちがいない。たとえ十パイサとはいええ、これだけの人数に連れてやったら、一週間分の食事がパーになってしまう。いや、一週間どころではないかもしれない。ピーターやマティスは冷淡なものである。「バクシーン」とつめ寄る子供に対して、さかんに、「Get away, boys!!」と怒鳴っている。しかし、日本ならば、どんな乞食だって、ボクのような服装をしたものには、決して物乞いなどしないであろう。逆に恵んでくれるのではないかな。

印乞連（印度乞食連盟）ベナレス支部の盛大なる歓迎を受けた後外へ出ると、今度は三輪車やらタクシーやらの客引きが待っている。

インド国内何処でもそうであるが、この客引き達、同じ車で同じ所へ行っても人により値段が違うことを云う。要は交渉しだいである。彼等は外国人と見るや、二倍から三倍の値段をふっかけてくる。しかし、値切ることにかけては天才的な三人、数人の客引きを相手に値段の交渉。あげくの果て、「We've got strong feet」の捨てぜりふを残し、歩き始め。客引き達は背後で何やらわめいている。しかし、そんなことを気にかける我等三人ではない。雨のそぼ降るベナレスの街へと消えて行く。目指すはガンジス河の畔にある沐浴場である。雨に濡れたベナレスの街からは、死の臭いが魅惑的に漂って来る。

ヒンドゥー教徒達は、死後その屍体を火葬しガンジス河へ流すことを望む。しかし、これを出来るのは有産階級である。さっきの乞食達は、いや、もう少し上のクラスの間達でさえ、それは不可能なのだ。彼等下層階級は、自分の死を悟るとベナレスへベナレスへと向う。金の少々あるものは汽車やバスで、金のないものは自分の足を頼りにベナレスへと向う。幸運にもベナレスの街へたどりつけた者は、ガンジスの流れで沐浴をし、あるいは、路上で行きだおれる。もちろん、ベナレスを前にして昇天するものも少なくないであろう。幸か不幸か、ボクはベナレスの街の路上でいくつかの屍体を見かけた。これらの屍体はゴミのようにかき集められ火葬されるのであろう。

我等三人の歩いてきた道は繁華街へ出て、そしてつきあたった。ピーターが通行人に道を尋ねる。まず右を指差し、「ガンガス・リヴァー？」と尋ねる。すると、インド人は首を

縦に振る。ピーター何故か今度は左を指差して、「ガンガス・リヴァー？」と再び聞く。するとどうであろう。またもや首を縦に振るではないか。ピーターの言ったことがわからなかったのか、それともどちらでもよいのかである。我々は希望的観測のもとに後者を選んだ。少し行き再び道を尋ねると、細い道を行けと言う。薄暗く、気持の悪い道である。しかし、それよりもまいったのは、悪臭である。旧デリーの街を歩いた時、馬糞の臭いがプリンしてまいったことがあった。しかし、ここはそれ以上にひどいではないか。何の臭いだけが皆目見当がつかない。とにかく臭さい。しかし、雨にも負けず、風にも負けず、耐え切れぬ悪臭にも負けず、我等三人はガンジスを目指して進んだ。

迷路の如くいりくんだ小路を抜けるとガンジスの流れが目に入った。沐浴場からは何やらお経のようなものが聞える。だんだんと聖地の雰囲気が出て来た。

沐浴場のわきの岸辺に立っていると、一人の男が近寄り、「舟に乗らないか？ 五ルピーでいいよ」という。五ルピーで乗ってしまるかと思ひ、二ルピーにしると云う。何だかんだしたあげく三ルピーとなる。船頭はじいさんである。何一つ説明するわけではないが、時々河岸を指差し、「何とかガート(沐浴湯)」とか云う。

それにしても、聖なる流れガンジスは何ときたないことであろう。汚物が浮かび、河はにがり、どう考えても聖なる河のイメージはわかない。インド人というのは、我々と美に対する尺度が異なるのであろうか？ この聖なる河ガンジス、大腸菌ウヨウヨのガンジス

河が最も美しい河なのである。

河岸では、大勢のヒンドゥー教徒達が沐浴をしている。沐浴ならまだしも、水を飲んでいる奴もいるではないか。いくら聖なる河でも、大腸菌ウヨウヨのこの河の水を飲んだら、いくら丈夫なインド人でも体に悪いと思う。ボクの友人がインドへ行く前、銀座にあるインド観光局へ行き、沐浴をしたいが何処のガートがよいかと聞いたところ、あんな河で沐浴したら一発で病気になるかと答えられた。それを答えたのは、日本人ではなくインド人なのだ。しかし、そいつだって国へ戻れば聖なる河で沐浴をするのであろう。インド人と日本人の身体構造は異なるのであろうか？ 大体ガンジスで沐浴しようなどと考える奴も奴だが、答えたインド人もインド人である。

さて、我々三人を乗せ聖なる河を漂う小舟は、約十分の航行の後、とあるガートへと着いた。一番大きな火葬場というのがそばにある。死の臭いにさそわれ、我等三人は火葬場へと向う。ガンジスを見おろす如く組まれたやぐらの上に火葬場はある。おりしも二体の屍体が焼かれている最中である。白い布で包まれた屍体は、キャンプファイアーの如く組まれた丸太の上に載せられている。そばには竹竿をもった男がいる。この竹竿、なんのためかおわかりかな？ この竹竿によって屍体をひっくり返したり、つついたりするのだ。男が竹竿で屍体の腹の部分をつつくと、屍体は二つに折れる。活字では表現のしようがないこの感動。異様な臭いがたちこめる。まさに人間の臭いである。死の臭い。聖なる街

ベナレスの臭い。しかし、何故か悪臭とは云えない。死の臭い、聖なる臭い、ボクはベナレスの異様な雰囲気魅了させられてしまった。

まさに今、二体の屍が聖なる大河へ帰らんとしている。この光景を写真にせんとカメラを向けると、竹竿の男、血相を変えて怒鳴る。「No photo!」「No photo!」しかたなくフラインダーから目をはずすと、まだ男は怒鳴っている。わけもわからず三人つつ立っていると、男我々に近より、レンズを指差す。レンズにキャップをしろということらしい。キャップをしようがしまいがどうだっていいではないか。キャップをすると、男満足気に立ち去る。

不服気に火葬を見ていると、竹竿の男再び現われ「バクシーシ」と手を出す。何がバクシーシだ、別に入場料を払えとは何処にも書いてないではないか。三人は断固彼の要求を拒否する。とぼけたピーターが、わざわざ不浄の左手を差し出し「バクシーシ」とやったものだから、男は怒った怒った。「オマエタチハ一るびいハラワナケレバナライナイ」「ナゼナノダ?」「ソレハココノ習慣ナノダ」「ソナナコトシライナイデ。オレタチハゼッタイハラワンゾ」「ぼりすヲ呼んデ来ルカラナ」「ジョウトウヤンケ。呼ンデモラオウ」

本場にポリ公を呼びに行つたのかどうかわからぬが、竹竿の男やぐらの下へと去つた。男の行方を追う如く下の小路を見落すと、またまた驚きである。いるわ、いるわ。乞食の行列である。そのうす汚なさは駅の乞食達以上である。彼等は各自お碗のようなものを持

ち、一列横隊整然と並んでいる。そこを葬式帰りの有産階級者達が通る。どういふつもりか知らないが、彼等は金をばらまくのである。そのばらまき方やまるで節分の豆まきの如くである。金をなんと心得ているのであろう。不心得者め。少しはこっちにもまわしてくれ、とは思わなかつたが、腹が立つこと大である。しかし、その腹立しきよりも、乞食達の動きに驚いて物も云えなかつた。金が投げられるや否や、飢えた魚の群れがエサに飛びつく如く集まる。その光景たるや悲惨の一語につきる。

大体インド人の考え方というのはおかしいのだ。金のある者がない者へ与えるのは義務であり、ない者がそれを受け取るのは当然の権利なのである。落し物などは天からの恵みとして有難くちようだいでしまふ。インドで物を落した場合、90%は出てこない。しかし、これもこの国では不思議なことではないのだ。

しかし、何よりも腹が立つのは乞食の態度である。日本ならば、といっても最近ではGNP世界第二位の我国では乞食も少なくなってきたが、「右や左の旦那様、あわれな乞食におめぐみを」とか云って、金が与えられれば、「お有難う御座居ます」の一言ぐらい云うだろう。ところが、インドの乞食はそんなこと全然云わないのだ。金をもらっても当然というような顔をしている。礼節を欠くといおうか何といおうか、まったく腹立しい。まあ、あまり書くとインド政府よりクレームがつきそうなのでやめておこう。いくらインド政府とはいえ、権力に楯つくことの出来ないのが小企業のつらさである。

さて、話とはとんでしまい、読者諸君の頭の中は混乱をきたしていることだろう。ここで話は元に戻るぞ。ポリ公を呼びに行った竹竿の男、三十分近く待てども戻らない。ポリ公が来たからからかってやろうと思っていたが、めんどうくさくなり三人火葬場を立ち去ることにする。

何処へ行こうかと迷っていると、一人のインド人の少年が現われ、「ゴールデンテンプル!!」と云い、一緒に来いと云う。どうせこいつら小使銭かせぎだ。こんなチビにおちよくられてたまるか。ゴールデンテンプルはあっちか、はたまたこっちか? 指を差しその方向を聞き出す。方向さえわかればチビには用はない。迷路のような細い道を三人は歩き始める。

雨はいまだにそぼ降っている。しかし、死の匂い(やはり臭いとすべきか?)に雨はなんとマツチするのであろう。「雨に死の匂い、よく似合う、コーヒーにクリープ、よく似合う」ああ、これは宣伝料を取らなければ。もつとも、日本の大企業は我々プロレタリアートを弾圧することに忙しいので、とんでもない話であろう。

またまた話は飛んでしまったが、やつとのことでゴールデンテンプルなる寺院へたどりついた。ちっけな寺である。もちろん金色なのだ、と言いたいところだが、世の中それほど甘いもんやおまへんで。うす汚ない寺である。このうす汚ない寺へ入るのに裸足になれという。嫌々ながら愛用の靴を脱ぎ、ゴールデンテンプルを参拝する。

突如寺院内より変てこりんなおやじが飛び出し、案内をするので一ルピーよこせと言う。もちろん我々三人は革命的に不払いを貫徹した。この男、意外と頑固であった。あくまでも一ルピーずつ払えとねばる。しかし、読者諸君御安心を、我々はそれに輪をかけて頑固なのだ。おっちゃんあきらめたか、我々の後についてくる。大体、こんなちっけな寺を案内する必要があるのかい。奈良の東大寺などとは違うのだよ。

さて、ガンジスを見おろすテラスのような処で写真を撮ろうとすると、例のおっちゃんカメラの前に立ちほだかる。「ドケ、オッサン。ワテラオマハンノウナウスギタナイノカめらニオサメタクナイデ。ドイテンカ」しかし、おっちゃんどうこうとしない。「マスター、ノー・フォト。一ルピー、バクシーシ」ここでも写真をとるのに金を取られる。一ルピー、ヤミレートで換えて約三十円。三十円位けちしなくてもいいではないか、諸君はそう考えるであろう。しかし、我々にとって三十円あったら、一回食事が出来てまだおつりが来るのだぞ。インドでは、たとえ三十円といえども死活の問題なのだ。大体、一円か二円まけさせるのに三十分以上もかけ、まけなかったからといってケンカ同然になる国である。どうして大米三十両も払えよう。読者諸君は信じないであろうが真実なのだ。金の有難さを知るためにも諸君は一日も早く中近東への旅を開始させたまえ。そうすれば、カメラに三十円もの大金を払いたくないボクの気持をわかってもらえると思う。

さて、我々三人、何とか三十円払わずに写真をとろうと試るが、おっちゃんも必死であ

る。カメラを向けるとレンズの前に立ちはだかる。もうこんな寺出てやれと思い、階段まで来ると、おっちゃんうらめしそうに、かついじきたなく「サー、バクシーシ」と言う。誰がこんな野郎にくれてやるか。

もう何処へでもいいと思ひ、小路をさまよひ出した三人。左へ曲り、右へ曲り、右へ曲り、左へ曲り。もうどっちにガンジスがあるのかも見当つかなくなつてしまつた。それだけならいい。後を歩いていたはずのピーターの姿がないではないか。立ち止り待てどもピーター来る気配なし。心配なので後戻りすれども発見できず。あきらめて駅へ戻ることにする。駅で待ってればそのうち来るであろう。

オンボロ馬車にゆられてベナレスの表通りを行く。先程の裏街とはまるで雰囲気異なる。表通りは他のインドの街と変わらない。聖地の面影は全くない。二十分程の馬車の旅で駅へ着く。駅の待合室、コンコースなど捜せども、ピーターの姿見当らず。

歩きまわるうちに、空腹感を覚える。まあ、腹がへつては戦さは出来ぬ。マティスとボクは駅前の食堂、といつても屋台に毛のはえたような所へ行く。ここいらが我々の大らかさである。たとえ友人が迷子になつていようと、自分の腹だけは満足させてやらなければならぬ。チャパティとカレー、おきまりの食事である。インドではこれが一番安く、絶対に腹痛を起す心配がないのではないだろうか。なまじ高級なものに手を出すと、我々の腹はそれを受け入れる能力がなく、たちまち「ひかり号新大旅行」である。(下り超特

急。こんな下品な、センスのない駄洒落しか出ないと思つたと自己嫌悪におちいる。)

食事のあとはお茶を一杯たのみ長いことねばる。疲れたのか、それともピーターの事が心配なのか、マティスは口数少ない。ボンヤリと通りを見ている。と、どうであろう、まるで勝利の戦士が凱旋する如く、ピーターが馬車に乗って通るではないか。いやはや人騒がせな奴だ。ともかくやれやれである。

### カトマンズへの道

ベナレスからネパールとの国境の街ラクソールへは汽車の旅である。距離としては五百キロメートルというところであろう。しかし、さすがインドである。この五百キロメートルを走るのに、何と二十四時間近くかかる。GNP世界第何位とかいう、自称大国では、五百キロメートルを三時間十分で走る列車があるという。インド人がこれに乗った時、その驚きたるやどんなものであろう。まさに「インド人もビックリ」である。

さて、話を少し教養度の高いものにしてしよう。(もともと、私は教養度の高い話しかしないのだが、この原稿はまるこぼりの他の連中の程度にレヴェルダウンしているのだ。)何故インドの汽車はこのようにのろいのか?電化されていない?それもあろう。しかし、最大の理由はレールの幅の違いである。ベナレスからラクソールへ行くまでにも、二回も乗り

換えるのだ。インドの鉄道において、幹線、すなわち、アムリツァール、デリー、ボンベイ、デリー、カルカタ、カルカタ、マドラス、以外の路線は、ほとんど全て、何百キロメートルかおきにレールの幅が異なる。これはイギリスのインド統治政策の一つである。すなわち、ある地域で反乱が起った時、武器その他の物の輸送の要となるのは鉄道である。その鉄道の幅を要所所で変えておけば、武器等の輸送には少なからず支障をきたすはずである。そして、反乱は地域的なものとなり、鎮圧は容易になる。このへんは大英帝国の技巧というか狡猾さというか、さすがである。しかし、これは我々貧乏旅行者にとって悩みの種である。わけもわからぬ小さな駅におろされ、来るか来ないかわからぬ汽車を待つのは嫌なものである。

我々三人は乗り換えのためサマステイプルなる駅に降り立った。真夜中である。列車が入るまでには少々時間がある。三人そろって空腹を訴えている。しかし、時まさに真夜中である。もとより、こんな小さな駅には、食堂など有ろうはずがない。ポツンと一つだけ売店のようなものがある。そこではお茶とクッキーのようなものだけを売っている。この際ぜいたくは言っていられない。戦前の日本軍国主義者達の便ではないが、ぜいたくは敵である。口に入るものならば何でもよいのだ。お茶とクッキー、質素な食事ではあるが、ボクの胃袋は歓喜をもって答えてくれた。実際、ボクの胃袋はボクの良き伴侶である。キウリ以外はどんな食物にも激怒することなく、忠実にエネルギーを与えんとしてくれる。



ネパールへ行く途中のスゴール駅で

ところで、インドのお茶であるが、これだけは何処で飲んでもうまい。イスタンブール以来、何処でも紅茶は安く飲めた。シャイとかチャイと言えば飲めたのである。これらのお茶もうまかった。確かにうまかったのだ。しかし、ミルクとともに飲むインドのお茶は、何処のそれよりもうまい。どんなにきたない食堂や屋台でも、お茶だけはうまい。しかも安いのだ。普通十五パイサから二十五パイサである。すなわち、邦貨にして七円前後というところだ。

とんだところで話が脱線しているうち、列車は脱線することなく無事ラクソールへと着き、場面はラクソールへと変わる。ラクソールの駅前にはずらりと馬車の群れである。値切りに値切ったあげく、三人で二ルピー。ピルガンジーというネパール側の町までである。



ところが、荷物を持った三人の男が、一台の小さな馬車に乗るといふことは至難のわざである。ようやくのこと乗り込んだが、今にも落ちそうである。馬車に乗るにも大変な労力が必要なのだ。乗る方も大変ならば、それを引く馬も大変である。一人乗をするは馭者の野郎だ。

何とか怪我をすることもなく、インド側の国境へとたどりついた。イミグレーションもカスタムも何のことなくすむ。ところが「ゴッス」だ。我等が馭者君、ここで終りだと言いつてではないか。ここはビルガンジーなのかと聞くと、ちがうと言う。「お主、我々をビルガンジーなる町まで連れて行くと約束したではないか。裏切りおるか。馭者の風上にもおけぬ奴。成敗してくれる。奉行所へ参れ」、てなことでおどすと、馭者君「ビルガンジーOK」と素直になる。

再び馬車にゆられてあこがれの国ネパールへと入る。ネパール側のイミグレーション、カスタムとも難なく通過。イミグレーションのおっさんに、カトマンズ行きは何時か、と尋ねると、八時だと言う。夜の八時かと思えば、朝の八時である。こんな所に一泊するのは馬鹿らしい。何か他に方法はないかと聞くと、ヒッチハイクをやれと言う。車は見つけてやるとのこと。なんと親切なお方であるう、と思っていると、これが大違いである。ヒッチハイクと言っても金は払うのだ。カトマンズへ行くトラックのへの便乗である。一人十ルピー。まあこんな所に一泊するよりはよからうと思ひ、トラックを見つけてくれ

るようにたのむ。見つけてくれたトラックは一時間後に出発することである。

アグラ以来車中二泊。少々疲労気味である。近くの茶屋で何か食うかと、ブラリ入る。何があるかと尋ねると、カレーがあると云う。それではカレーとライスとをくれと三人口をそろえる。ところがどうだ、ライスはなしとの返事。ならば仕方ない、チャパティをくれと再び口をそろえる。Oh、Jesus Christ、チャパティもないのだ。要するにカレーしかないのだ。いくら我親愛かつ忠実なる胃袋君でも、あのカレーだけを流し込んだならば激怒するにちがいない。わびしいかぎりだが、またお茶だけである。

となりに座っている男に「マネーチェンジ？」と尋ねると、イミグレーションの建物を指差し、あそこにバンクがあると云う。そんなことは百も承知なんだよ。我々はブラックマーケットで換えたいんだよ、と言うと、ネパールにはブラックマーケットなんてないと言ふ。おかしい。デリーでの情報によれば、1ドルが16ルピーになるはずだ。(公定十ルピー)カトマンズへ行けばあるのだろう。この辺ではインドルピーが通用するので、ネパールルピーなどなくてもさほど不自由しないのだ。あの紙切れ同然のインドルピーが、この辺ではネパールルピーより一段上にあるのだ。しかも、ドルはあまり欲しがらない。もつとも、こんな田舎ではドルの使い道などあるわけではないのだ。

さて、となりの男、やおらパイプを取り出し何やらつめる。マリファナではなさそう。それは何ぞやと聞くと、吸えと言う。三、四回づつ吸って男へ戻す。少しすると頭がまわ

り出すではないか。いい気持である。今までハシーシやマリファナもずいぶん吸って来たが、こんないい気持ちになったことはなかった。疲れていたためであるかもしれない。実にいい気分である。しばしけだるい快感を味わった後、これは何かと尋ねる。ガンジャだと言う。ガンジャ？、初耳である。もつと吸うかとすすめるが、やめておこう。ここで完全にラリってしまったらカトマンズへの到着が遅れる。

三十分もすると頭の中は平常に戻って来た。それからしばらくして、トラックの運転手が迎えに来た。鉄パイプのような物を積んだトラックである。我々ホロのかかった荷台へと乗せられる。ネパール人の同乗者が数人。この連中は、すぐ近くのビルガンジの街内で降りてしまった。残ったのは、運転手、助手、それに我々三人である。ビルガンジの街はインドのそれと変わらない。インド人とネパール人が半々というところだ。

半時間程ビルガンジに停車した後、カトマンズへと向う。ビルガンジを出て数時間は平地である。広々と広がる水田は、インドの田園風景と変わらない。のどかなる田園を眺めていると、助手が窓から首を出し、荷台へひっこめと指図する。冗談じゃない。このクソ暑いのに荷台の内になんかいられますかっていうんだ。こうしていると風にさらされていい気持なんだ。助手の命令を無視していると、彼氏少々怒ったのか、語気荒く何やらわめいている。「ポリス。ポリス」。そうか、ポリスのチェックか。それならば引っ込んでやろう。このポリスチェック、中近東の何処をバスで旅行してもあるようだ。イランのハマ

ダンからテヘランへ至る五百キロメートルの間には、五ヶ所のチェックポイントがあった。ここネパールでは、トラックの便乗は禁止されているのであろうか。そうだとすればおかしな話である。このトラックを世話してくれたのはイミグレーションのおっさんなのだから。まあいいそんなことはどうでもよいことなのだ。我々はカトマンズへ着けばそれでよいのだ。

第一のチェックポイントは無事通過。そろそろ山道へと入る。風も涼しさを増し気持ちよい。伝えられた洪水（千九百七十年七月にネパールに大洪水が起り、陸上交通が寸断された）の影響はさほど残っていない。

このあたりの風景は日本のそれに似ている。故郷に帰った気分である。と言っても、ボクの故郷は山などない東京であるが、このところはおおめに見て下され。とにかくすばらしい風景になって来た。ルノー・ベルレー主演の「カトマンズの恋人」に出て来たのもこのあたりだろう。陽はすでに山の端にかかっている。河のせせらぎが、風の囁きが、鳥の鳴き声が耳に入る。空気がうまい。ああ、今日も生きているのだと感ずる。明日も生きたい。（少々ロマンティズムにおちいってしまったが、この光景につつまれていれば、いくらリアリストのボクといえどもそんな気分になる。よって、少々このような文体で書き進めよう。）

神の吐息である空気、神に一番近いこの国ではそれがうまい。私は生きている。神の吐

息を吸って。今日も生きています。神の加護の下、明日も生きるであろう。神よ、私を守りたまえ。(少々しらくムードになって来たので、本来のボクに戻るとしよう。)

第二のチェックポイント通過後、茶店で休憩をとる。またまたお茶だけである。ベナレスを出て以来、お茶以外のもので胃袋へ入ったのは、クッキーと神の吐息だけである。腹へったなあ。

お茶を飲んだ後、少し散歩をする。道路わきには河が流れている。本当に日本にいるような気分である。茶屋の造りも日本のそれと似ている。人間もよく似ている。ひよっとすると夢を見ているのではないだろうかとつまらぬ事を思う。望郷の念をこわすが如く運転手の怒鳴り声が響く。再び出発だ。カトマンズへの道はまだ遠い。

日はすでに暮れ、時折すれちがう対向車のヘッドライトがまぶしい。夜に入ると少々肌寒い。星がきれいだ。星を見ていると、イランの砂漠で野宿したことを思い出す。総勢三十人からの大野営であった。あの時の星空は素晴しかった。まるでプラネタリウムのようなだった。(このへんが都会っ子の悲哀である。)そして、このネパールの星空も美しい。黒いカーペットに真珠をちりばめたようである。星空に魅了されているうちに、一軒の民家へと着く。運転手が降りろと指示する。どうやら夕食らしい。家の内へ入ると、何やら異様な雰囲気である。しかし、レストランというか食堂というか、食物を食わせる所にはまちはないようだ。何やらわけのわからぬカレーを食わされる。空腹には何を食ってもうまい。

思えばベナレスを出て以来、ひもじい旅であった。

運転手とその助手君も食べ終ったようだ。そろそろ出発かなと思っていると、今晩はここに泊り、明朝四時に出発すると言う。泊るのはよいが、いくらかかると尋ねると、タダだと言う。ここで我々三人は喜んだ。タダだよ。タダだよ。ピーターなど発狂せんばかりに喜んだ、というのは嘘であるが、とにかくタダよりよいものはない。

この家の主人らしき男が我々を二階へ案内してくれた。もちろんこんな山の中の家には電気などない。ろう燭の火に照らし出された部屋は、異様な臭いにつつまれている。家畜小屋の二階ではないだろうか。とにかくタダなのだから文句は言うまい。パキスタン以来の湿気ですっかりベトベトになってしまったシュラフを敷き眠りにかかる。

アグラからの旅で疲れたためであろうか、三人ともグッスリと眠ってしまった。明方、まだ暗いうち、運転手に起きた時はまだ眠り足りなかった。寝ぼけまなこをこすりながら、またまたカトマンズへの道は続く。

三十分もすると空は明るくなって来た。ビルガンジーを出てから三つ目の峠を越えんとする時、ヒマラヤの連山が眼に入ってきた。雲の上に聳える山々は恐しく高い。そして恐しく美しい。ピーターが、あれはアンナプルナ、あれがタウラギリ、あれはエヴェレストかもしれないなどと説明してくれる。なんと美しい光景であろう。崇高さをも感じさせる。写真を撮りたいが、このオンボロトラックの上からでは無理だ。と言って止まってくれ

様子もない。あきらめよう。もうすぐカトマンズだ。今回の旅の最大の目的地、カトマンズ。どんな街であろう。

### あこがれの街カトマンズ

トラックが着いたのは中央郵便局の近くである。やっと着いたのだ。さて今夜は何処に泊るかと考えていると、一人のチビが近寄って来た。「宿を世話するよ。」下手くそではあるが英語で話しかける。いくらだと聞くと、三ルピーと答える。ついて行くだけについて行く。

五分位の散歩の後、ついたところはシティロッジなるホテル。ドミトリが一人三ルピーだと言う。もちろん、相手の言い値で泊るような我々三人ではない。一ルピー半。いや、ダメ。一ルピー半。ダメ。一ルピー半。OK二ルピー。こんな会話のうちに二ルピーまで下がった。それではここに荷物を置いて、他のホテルを捜そうということになる。マティスが残り、ピーターとボクは別々にホテル探しに出かける。五、六軒見て回ったが、どれも五十歩百歩である。二ルピーから三ルピーである。邦貨にして三十円〜四十円。一軒だけ一ルピーという所があったが、おそろしく汚ない部屋である。

シティロッジへ戻ると、ピーターも戻っている。やはり同じとのこと。ここに二ルピー

で泊るのが得策のようだ。ドミトリは最上階の四階である。幅七十センチメートル、長さ二メートル程の板が十数枚並べてある。これがベッドなのだ。この上にシュラフを敷き寝るのだ。部屋自体は明るく、清潔な感じである。数人のヒッピーが同宿である。とにかくにも、あこがれのカトマンズへやって来たのだが、眠くてしかたない。こういう時はやはり眠るに限る。

目を覚めた時はもう夕暮れであった。何処へ行くあてもないので、夕食にでも行くかと二人を誘う。するとマティスが一枚の紙切れを差し出す。キャビン・レストランとかいう所の広告チラシである。なんだ、広告かと捨てようと思うと、変てこな文字が眼に入る。ハシーシケーキ、マリファナプディング、ガンジャコーヒー、ハシーシキャンディ、ハシーシシガレット。これがキャビン・レストランのメニューの一部なのだ。これは是が非でも行かなければならない。マティス、所在地を知るかと思えば、これが知らないのだ。すると、一番奥に陣取っていたブロードのロングヘアアの男が、それならバザールの方だと教えてくれる。親切にも地図まで書いてくれる。歩いても遠くないとのこと、我等三人早速出かける。

夕暮れ時のカトマンズ、のどかなものである。大通りへ出ると、驚き桃の木、山椒の木である。「リョウガエシマセンカ？」日本語だ。日本語でブラックマーケットをやっている。ピーター不思議そうな顔をしてボクに尋ねる。「タカシ、あいつの言うことわかるのか？」

「わかるさ。あいつは日本語でマネーチェンジと言っているのさ。」ここは一番、このヤミドル屋をからかってやれと思ひ日本語で聞く。「一ドルいくらだ？」案の定、何も答えられない。要するに、彼等は「リョウガエシマセンカ？」以外の日本語は知らないのだ。誰か日本人が教えていったのであろう。

もう一度、今度は英語で「一ドルいくらか？」と尋ねる。「一ドル十二ルピー。」何をぬかすか、こしやくな。一ドルが十六ルピーになることはわかっているのだ。人を甘く見るなよ。「一ドル十六ルピー。」我々は断固一ドル十六ルピーの線を勝ち取るぞ!!。十分の後、我々は一ドル十六ルピーの線を勝ち取った。ヤミドル屋ついて来いと合図する。連れて行かれた所が一軒の民家。細い路地を入った所に入口がある。入ったとたん、入口は閉められ、貫抜きがかけられた。部屋の内はまっ暗である。これはヤバイかなと思う。男すぐに電燈をつける。今度は部屋の奥にある急な階段を昇るのだ。電燈がついていると言えども、うす暗いこの階段はなんとなく恐しい。階段を昇り切った所に部屋がある。民芸品のような物がショーケースの内に入れられ飾つてある。出て来たヤミドル屋のボス、さぞかし悪党面をしているかと思えば、これが女。しかし、女郎屋のおかみといったムードである。本質的には女の方が冷酷なので、こういった商売にはむいているかもしれない。そんなことはどうでもよいのだ。五ドルで八十ルピー、無事受け取り外へ出る。

さて、キャビン・レストランへ行こう。カトマンズの繁華街らしき所を通る。夜空に映

えるネパールの寺院はエクソティックなムードをかもしだす。やっとカトマンズへ来たのだなという実感が湧く。実につまらない映画ではあったが「カトマンズの恋人」を見て以来、この街に魅了され続けて来たのだ。そのカトマンズの街を今歩いているのだ。この感激、なんと表現しよう。

道路の左右に並ぶ商店、これがカトマンズのバザールなのだ。キャビン・レストランはバザールの終り近くにある。子供に聞くと、ここだと言う。細い路地を入った左側である。横七、八メートル、縦十五メートル位の小さな部屋である。およそレストランの雰囲気はない。すでに数人のヒッピーがたむろしている。部屋にはローリング・ストーンズの曲が流れ、しみついたハシシシの臭いが鼻につく。

まずは腹ごしらえからと、ハンバーグを注文する。カトマンズでハンバーグを食うとは思わなかった。水牛の肉らしいが、けっこういける。ベナレス以来初めてのまともな食事である。食事の後はデザートにハシシケーキを食う。それを食べ終えたところで、となりのテーブルよりマリファナのパイプがまわつて来る。三服も吸うとラリつて来た。ハシシケーキが効いて来たのだろう。吸うより食ったほうが早いのかな。

となりに座っているマティスは、気持ちよさそうに頭を壁にもたれかけている。ピーターも同じである。こんなにSonedしたのは初めてである。ハシシケーキのおかげだ。頭の中がクルクル回っている。眼を閉じると、頭の回転に合わせてカラフルな渦がまわって

いる。LSDによる幻覚状態よりは軽いものだろう。意識だけははっきりしている。酒よりもずっといいではないか。ボブ・ディラン先生も言っているではないか。「Everybody must get stoned」そう、みんな吸って、平和に暮らそう。

### カトマンズの夜は明けて

昨夜のハシシーンはよく効いた。一晩たった今でも、まだ少しフラフラしている。しかし、酒のように二日酔いというようなものはない。すなわち、頭痛がしたり、吐き気がしたりすることは全くないのだ。さわやかな目覚めである。

時計を持っていないので何時頃かはわからない。しかし、陽はすでに高く昇っている。ピーターに尋ねようとすると、奴等まだ寝ている。まあ時間などどうでもよい。そう思うと急に腹がへって来た。昼飯時なのだろう。(このへんがボクの頭の論理的なところである。)

食事のため外へ出ると、少々暑さを感じる。それでもバグダッドやペシヤワールの暑さからすればずっとよい。噂には聞いていたが、カトマンズの街にはヒッピーが多い。ウヨウヨいる。カトマンズの人口の何十パーセントかはヒッピーではないだろうか？彼等の服装はまちまちである。しかし、それは個性的であり、格一化されたものはない。シャツ一

枚にしても、いろいろ摸して買って来るのだろう。日本のフーテンとは大分違う。ヒッピーというと、汚なくてクセの悪い連中という概念を持つ人が少なくない。しかし、美には尺度がない。美に対する感覚は客観的なものではなく主観的なものである。大勢の人が美しいと言えば美しい、汚ないと言えば汚ない、そんなものではないはずだ。だからヒッピーが汚ないと言えないのじゃないかな。また、第二の偏見に対してであるが、ヒッピー、といっても中近東あたりを旅しているヨーロッパの若者達は非常にしっかりしている。盗みなどする者は少ない。十人もいるドミトリーに荷物を置きっぱなしにしても、まず安全である。一種の黙約があるようだ。

さて、昼飯のために入ったのが、キャピタル・レストランなる中華料理店である。店内へ入って驚いたことは、キャピタルという名にもかかわらず、毛沢東の肖像がかかっているのではないか。(作者注→キャピタルとは首都の意味ではない。)カトマンズの街にも中国人は数多くいるようだが、やはり地理的な関係からして、毛沢東支持者が多いのであろう。毛沢東支持のオヤジでも飯は食わせてくれるだろう。

メニューを見ると、わけのわからぬ中華料理が書かれてある。無事をとって、中華料理店に入りながらフライドエッグとトースト、それにお茶を注文する。調理場の奥より鳥の悲鳴らしきものが聞こえる。まさか卵を生まないの、オヤジ頭に来てしめ殺しているわけじゃないだろうな。そんなことをされたら、卵にニワトリの怨念がのり移って一生たた

られてしまうかも。しかし、どうやらボクの推理はまちがっていたらしい。フライドエッグは無事ボクの食卓へ運ばれた。油の臭いが鼻につきうまくない。トーストとお茶はうまくいった。

腹もふくれたことであるからカトマンズの街でも見てまわるか。まずはトゥーリスト・インフォメーションへ行き、地図をバクシーシする。何処の国へ行っても主要都市にはトゥーリスト・インフォメーションがある。これが便利なのだ。地図はくれるし、いろいろ教えてくれる。しかもすべて無料なのだ。だから利用するに限るのだ。

カトマンズの地図は今までもらったものの中で一番おそまつで、一番おもしろい。手描きの地図をコピーしたものなのだ。しかも、この小さな都会カトマンズではこれで充分なのだ。ネパールの首都であり、ネパール第一の都会のカトマンズではあるが、小さな都市と言うよりは、大きな町と言ったほうがよいだろう。街の中心部より十五分も歩けば田んぼの真中である。もちろん高層ビルなどない。のどかな街である。ヒッピーのメッカになるだけのことはある。

インドからカトマンズへ来ると何故か安心したような感じになる。日本の風土に何処となく共通するものがあるからであろうか？。いや、それだけではない。バクシーシがないのだ。カトマンズの街には乞食が少ない。インドでは途絶えることのないバクシーシの攻撃であったが、ここではそれが無いのだ。そのことだけで心が安まる。生活水準は多分イ

ンドより低いのであろうが、インド人における悲惨さをここでは感じさせない。人々の表情は意外に明るい。

### 特別付録、「日本人とネパール人」

近頃「日本人とユダヤ人」なる本が世の話題のタネとなっているが、ここでその二番煎じをやろうというわけではない。ボクがネパールで感じたことであるが、日本人とネパール人との風俗の間に少なからぬ共通点が存在するのだ。この点を文化人類学的かつ出鱈目に掘り下げてみたい。

まず第一に、ネパール人の男性の服装である。着物の丈を短くしたような物、着物のミニと考えればよい、それを着ているのだ。これと日本の着物とが起源を同じにするかどうかはわからないが、とにかく似ているのである。

第二に、子供の遊びである。たこ上げとか独楽まわしなどは何処の国にもあるだろう。ボクが気付いたのはこれである。昔「セッセッセーのヨイヨイヨ、桃太郎さん、桃太郎さん……」というのがあったのを御存知かな。そう、唄に合わせて手を拍つ遊び、あれがあるんだなあ。もちろんネパール語で歌って遊んでいるのだが。

第三には、ネパール人の話す英語である。ネパール人も決って英語を上手に話すとは

言えない。しかし、その下手くそな英語の響きが日本人の下手くそな発音とよく似ているのだ。ネパール語については一片の知識もないので何とも言えないが、構造言語学上から見ると共通点があるのではないだろうか。もちろん、ネパール語と日本語が親族関係にあるなどとは言えないが。

第四には、ネパールの民家の型である。木造のものはないが、その格好は日本の土蔵によく似ている。

以上四点に関して類似点をあげたが、なんの結論を出すことも出来ずこの章を終えることにする。

### ベイカー・パーティー

カトマンズへ着いて四日目になる。昨夜モンキーテンゲルで会った志賀・渡辺両氏がシティ・ロッジへ移って来た。これで日本人が三人、スイス人が二人、イギリス人が二人、フランス人が二人、カナダ人が一人となったわけだ。

今夜は満月の夜とのことで、カトマンズの街は祭の最中である。いろいろな集団が隊列を組み、それぞれ街をねり歩いている。夜にはモンキーテンゲルの近くでヒッピーのベイカー・パーティーがあるそうだ。ハシーシケーキを作り、シタールの演奏を聴くパーティー

ーとのこと。何やらおもしろそうだ。物見高いは江戸っ子の常。もちろん行くことにする。夜が来るのが待ちどおしい、と思っっているうちに夜になる。(これが文章のよい点であろう。作者の意向一つで、段落を一つ違えるだけで、一億年でもすぐ経ってしまう。)

ピーター達を誘おうと思ったが、彼等外出中である。志賀、渡辺、そしてボクの三人はシティ・ロッジを出た。このロッジには門限があるのだ。十二時である。しかし、今晩は祭なのだからいいではないかとおやじを説きふせる。

夜道は、男三人連れと言えども少々恐しい。モンキーテンゲルを目標に行き、そこで聞けばわかるだろう。モンキーテンゲルまでは約三十分。長い階段を昇りつめてモンキーテンゲルに至る。疲れた、疲れた。目玉のモンキーテンゲルの境内では何やら儀式を行っている。やはり祭の一部なのだろう。

高台から見るとカトマンズの夜景。あまり美しいとは言えない。裸電球の灯だけなのだ。ホンコンの夜景が百万ドルならば、カトマンズの夜景は三ドル半ぐらいだ。(作者注↓三ドル半という数字には全く意味はない。あまり気にかげぬこと。)

三ドル半の夜景にいつまでも見とれているわけにはゆかない。ベイカー・パーティーをやっている所を聞き出し、そこへ向う。夜道を歩いてたどりついた所が、小さなお寺。その入口に受け付けのようなものがあり、ネパール人が座っている。金を取られるのかなと思えば、これが取られない。



境内にはすでに多数のヒッピーが集まっている。五人前後のグループとなり、ハシシーやらマリファナを吸っている。整然とした雰囲気である。乱交パーティーのようなものを連想された読者諸君には残念であるが、どこことなく神聖なものさえ感じさせる。境内中央には火にかけられた鍋があり、黒衣に身を包んだ女性がハシシーケーキを作っている。シタールの演奏はまだ始まっていない。

我等三人はそれぞれのグループにも入ることが出来ず、しらせ続けている。どうせパーティーに行けば、誰かハシシーでもマリファナでもまわしてくれるだろう、と考え自分のハシシーはホテルにおいてきたのだ。しかし、世の中そんな甘いもんやおまへんにゃ。誰もまわしてくれない。まわりの連中はすでに *sound* になっている。しらせているのは我々三人だけである。

そこへ、一人のヒッピー、主催者側の人間だろうが、寺院の仏像の版画を持ってまわって来た。いらぬかと言う。しかし、金をとられてはかなわないと思ひ、断る。志賀君は受け取った。いくらかと言ねると、フリー、すなわちタダだと言う。ああ、損した。チクショー!! *Shit!* シャイセ!! しかし、今さらくれとも言えず、あきらめる。ハシシーもなく、音楽もなく、その上こんなへままでやってしまつて。ああ、ついていないぜ。しかし、せっかく来たのに帰ることはないぜ。もうすぐシタールの演奏が始まるであろう。

正面右手の木の下に、シタール、タブラ、そしてタンブーラではなく、ヴィーナのよう

な楽器が置いてある。ネパール人の男三人が楽器のそばに座り、調弦を始める。なつかしいあの音である。ラヴィ・シャンカールのレコードによって聴き慣れたあの音である。ボクが一番好きなあの音である。

三十分程の調弦の後、演奏が始まる。まず、無伴奏でシタールのインプロヴィゼーション。それからヴィーナらしき楽器のソロが続き、タブラが入る。あとはタブラの伴奏により、シタールともう一つの楽器のソロがくりかえされる。それぞれソロをとっていない時はタンブーラの役を演じている。しかし、このトリオ、決して上手とはいえない。ラヴィ・シャンカールのトリオなどと比較するのがそもその間違いであろうが、しかし、あまり上手ではない。シタールのソロがスムーズに進まない。

ヒッピー達はおとなしく聞いている。我等三人が話をしていると、静かにしろと言う。新宿のDIGとか有楽町のママといったジャズ喫茶を思い出させる。この二つのジャズ喫茶では客が話していると、他の聴いている人の迷惑だからといって注意されるのだ。

しかし、この連中、本当にシタール音楽、ラジャスタン音楽のよさがわかるのだろうか。単にエクソティックなものに魅了されている人間が多いのではないだろうか。まあ、そんなことはボクには関係ないのだ。

さて、シタールの演奏も終りに近づいて来た。インプロヴィゼーションが盛り上がったところでシタールの演奏が終る。麻薬にラリっているのか、シタールの演奏に酔つてしま

ったのか、フリーク達はおとなしくなっている。

パーティーというよりも、一種の宗教的儀式的雰囲気帯びて来た。中央のファイアーに再び黒衣の女性が現われ、鍋の中をかきまわしている。もうすぐ出来上がりであろうか。早く食べたい。しかし、ほのかなる期待は裏切られた。黒衣の女性は再び消え、その後三十分程経過しても出て来ないではないか。ハシーシケーキの夢もはかなく消え、とたんに眠くなって来た。今夜はついていない。どうせstayedしたところで、ろくなことにならないであろう。もう今夜は帰ろう。三人はションポリして夜道を歩く。

さほどおもしろくはなかったが、よい経験となった。日本ではあんな整然としたパーティーは考えられないであろう。何の目的をも持たない集会。ただ集まり、ハシーシを吸い、満月を喜ぶ集会。荒廃しきった現代社会において、これほど人間的な集会があるだろうか。素晴らしきヒッピー達よ。素晴らしきフリーク達よ。いつの日か、日本にもベイカーパーティーを。

### ラジギール温泉の念仏

素晴らしきカトマンズに別れを告げ、再びインドへと入る。カトマンズよりの同行者は志賀・渡辺両氏。パトナの近くに日本寺があり、しかも温泉まであるという情報をカトマン

ズで入手、早速ラジギールへと向う。

ラジギールの駅まではなんのトラブルもなくやってきた。ラジギール駅の三等窓口で、ステューデント・コンセクション(学割)のカードを出し、パトナ経由カルカタ迄のチケットを買おうとする。ところが、Fuckingである。「この紙にはパトナが書かれていないので、パトナ経由の切符は売れない。カルカタ迄直行なら売ってやる。」と言うではないか。無理押しすればなんとかなるだろうと思いつ頑張る。しかし、敵もさるものひっかくもの。駅長のところへ行けと言う。こうなったら駅長だろうが村長だろうが誰でもかまわない。

Station master の看板のかかった部屋へ入るや否や「駅長はどうだ？」と怒鳴る。駅長を名乗り出た男に事の成り行きを伝える。そして、パトナ経由でカルカタへ行けるようによろしく頼んだ。ところがこの野郎、相当の石部金吉というかわからずやというか、それは出来ない相談だと言うのだ。

しかし、これはデリーの駅の学割係のオバチャンの間違いなのだから、ラクソールの駅長であるお前さんは代りに責任を取るべきだと主張する。駅長、「これは北部鉄道のみスである。我々は北部鉄道の管轄ではない。」と言い張る。もうこうなると頭に血が上る。二十才の志賀と二十二才のボクは、今にも駅長に殴りかからんとする。そこをなだめるのが、さすが年長者の渡辺氏である。我々二人を外に出し、一人で何やら交渉している。しかし、

十五分もすると、ブンブンしながら出て来た。交渉決裂である。仕方なくパトナまでは正規の料金を払う。

インド人とは何処にこのように融通のきかない人種なのだ。Fuck India!!

さて、こちらはラジギール。パトナからバスで二時間、そこで乗り換えまた一時間、計三時間の地点にある。目指す日本寺は何処やろかと尋ねる。「ジャパニーズ・テンプル?」「ジャパニーズ・テンプル?」と四方を指差し尋ねる。相手が首を縦に振った方向へ行けばよいのだ。(もつとも、ブルガリアの如く、イエスの時は首を横に振り、ノーの時は縦に振る所もあるが。)ともかく、四方を指差して見たが誰も答えない。

そこへ現われた一人の男。御存知、馬車のオッチャンである。値段の交渉もしないうちに、我々の荷物を積み始める。このままのってしまったら大変だ。ボラれることは間違いない。いくらかと問うと、三ルピーだと言う。二ルピーにしると言い返す。あっさりとまける。Sitim ー ルピーと言えばよかった。しかし、時はすでに遅し。

強い陽射の下、馬車に揺られること二十分。やっとの思いで着いた日本寺である。しかし、日本寺のイメージはうすい。パゴダなどあり、どちらかというところ、ビルマあたりの寺院のようだ。門にはカギはかかっておらず、人を呼べども来ないので失礼する。炊事場のような所で一人のインド人の少年が遊んでいる。我々が行くと「今日は。」と日本語で言うではないか。そして、少し待てというような動作をする。

数分後出て来たのが、まさしく日本人の坊さん。「よくいらっしました。」と親切に応対してくれた。ボクは二泊、渡辺氏が四泊、志賀が一週間。それぞれ別の日に出発することになる。

日本寺、正式の山号寺号を日本山妙法寺。宿泊無料。部屋はまあまあである。志賀は一階で坊さんと一緒、ボクと渡辺氏は二階に一部屋を借りる。

三人共今すぐにも温泉へ行きたい気持ちである。しかし、着くと早々出かけたのでは、あまりにもバツが悪い。我慢我慢。陽はもうかなり傾いている。疲れたなと思った時、本堂の方より怪奇なる太鼓の音が響いて来る。同時にさきほどの坊さんが入って来る。「おつとめの時間ですので本堂へ。」と言うではないか。おつとめ? いやな予感がしたが、やはり当ってしまった。

本堂へ通されると、小さな太鼓を持たされ南無妙法蓮華経である。傲慢ではないが、生まれてこのかたお経などをあげた事は一度もない。それがインドくんだりまで来て南無妙法蓮華経とは。まいった、まいった。しかし、何事も経験である。無心に太鼓をひっぱたくこと、実に二時間。足はしびれる、声は枯れる。言うことなしである。二時間とは何と長いのであろう。この読経(?)については後でゆっくりと述べるとしよう。

さて、夕食の時間である。何を食わされるやらと、半分は期待に燃え、半分は不安におののき、食卓へとつく。皿に盛られた飯と野菜の煮付け。どうやら不安のほうが当たたら

しい。

食前のお祈りの後、箸を取る。野菜の中にキュウリに似たものが入っているではないか。キュウリ、キュウリ、キュウリ。これは、ボクがこの世で一番嫌いなものである。ブスな女よりも嫌いである。キュウリを食うくらいなら、舌をかみ切って死んだほうがましだ。(これは少々大袈裟であるが)とにかく嫌いなのだ。それが、その親類がこの野菜の煮つけにまぎれ込んでいる。おお、神様仏様。万事窮す。

しかし、仏のお恵みを食べないわけにはゆかない。(何故かここで急に信心深くなる)苦悩する現代の天才クロサキタカシ。(読者諸君はここで笑ってはならない。ボクは本当に悩んだのだ。) to eat or not to eat, that is a question. ウーン。ウーン。(さかんに悩んでいる音) そうだ、事は簡単だ。「ボクこれ嫌いなんです。食べられません。」そう言えればいいじゃないか。

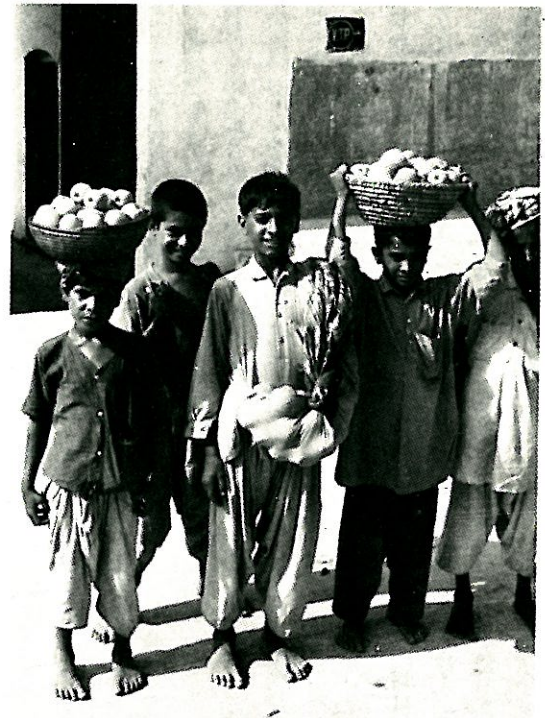
果して、そう言ったところ、冷たい返事。「食卓に出されたものはすべて食べて下さい。米粒一つも残さぬよう。」再び苦悩する現代の天才。(少々しつこい感じがしないでもない)「そんなこと言っちゃボク知らない。イヤイヤイヤ」とでも泣き叫ぼうとしたが、男のプライドが許さない。見かねた志賀が「オレが食ってやるよ。腹へっているから」と助け舟を出してくれる。「オー神よ。私はなんと良き友を持ったことであろうか」と叫びたい気持ちであった。読者諸氏も、よかった、よかったと思うであろう。

ところがである。空になった皿にお湯を注ぐのである。そのお湯で皿を洗う。自分の使った食器を自分で洗うのは当然であろう。そう、当然である。しかし、洗うだけではないのだ。このお湯を捨てることは出来ない。それではどうするのか? 自分の腹へ流し込むのである。自分の手で洗ったのだから気持ち悪くない、そう考えられる人は幸せである。ボクはやはり抵抗を感じる。(さつきトイレへ行った時、手を洗っとけばよかった) まあ、キュウリを食うよりはましである。無念無想、一気に口の中へ流し込む。飲んでしまえば普通のお湯と変りない。少し塩分が混じっただけだ。腹を下す心配はないだろう。とにかく夕食は終わった。魔の夕食であった。

教訓・タダより高いものはない。

楽しい夕食も終り、みんな温泉へ行くことになる。待つてました。希望に燃えて夜道を歩く。どんな温泉だろう。風呂へ入るのはバグダッド以来だ。(もちろんシャワーは毎日とは言わないが、よく浴びていた)

くだらぬことをあれこれ考えるうちに温泉へと着く。野天風呂とでも言おうか、とにかく天井がない。しかし、四方は壁に囲まれている。さあ、温泉だ、温泉だ。気も狂わんばかりに、シャツを脱ぎ、ズボンも脱ぎ、とうとうパンツに手がかかる。坊さんあわてて叫ぶ。「パンツを脱いではいけません。パンツはいたまま入浴するのです。先日、パンツを脱いで入った日本人が新聞に出ました。ここでは、女の人などサリーのまま入るのです



インドの子供たち

よ。パンツをはいたまま風呂に入るなどは風流の道に反する。夜も遅いことだしいではないか。そうは思うが、やはり新聞など出されたくない。仕方なくパンツのまま湯に入る。パンツを気にしなければ、いい湯だ。風呂は広くはないが、狭くもない。坊さんの話によると、この位の風呂がいくつもあるとのこと。

月明りに照らされ温泉につかる。インドにいるという気がしない。日本の片田舎の温泉にでもいるようだ。鼻唄の一つも出てこようというものだ。「草津よいとこ一度はおいで、ドッコイシヨ、お湯の中にも……」おお!!素晴らしいかなラジギール温泉。日本一の旅行

社と自称する〇〇〇〇交社のガイドブックにさえ出ていない温泉。(まるこぼろ旅行団の本には何故か出ている。)

行が変わるとともに日も変わる。ラジギール二日目の朝である。いや、早朝である。何故に朝寝坊のボクがこんなに早くから起きているのか? ボクはもともとと眠っていたかった。しかし、朝五時頃である、本堂より再び鳴り響く太鼓の音。あのバカデカイ音には目を覚さざるを得ない。

「おつとめの時間です。本堂の方へ」やれやれ、またナムミョーホーレンゲキョーか。渡辺氏と連れ合って本堂へ行く。志賀はまだ来ていない。

例の小さな太鼓を手に持ち、眠い目をこすりながら「おつとめ」をする。坊さんは太鼓をたたく。空腹に太鼓の音は響く。小さな太鼓を打とうとするが、空腹と睡魔のため思うが如く打てない。となりはいかに、と渡辺氏の方を向くと、こちらボクよりもひどい。太鼓を持ちながら居眠りをしているではないか。そのくせ口だけはパクパクしている。

ナムミョーホーレンゲキョーと一度言うのに十秒かかったとして、一分間で六回、一時間で三百六十回、二時間でなんと七百二十回も言わなければならないのだ。これだけおつとめしたのだから、日本へ戻った晩には何かよい事があって然りであろう。いや、日本へ戻る前に何かあってもいい筈だ。

三十分程すると志賀が入って来た。これまた眠そうな顔をしている。一週間ここに

と言っていたわりにはだらしのない志賀君である。とにかく三人の敬虔なる信者達は、雨にも負けず、風にも負けず、睡魔にも負けず、ただひたすらナムミョーホーレンゲーキョーを唱えるのでした。

その日の夕方になりました。「ボクは明日ここを立つが、二人はどうする？」と渡辺・志賀両氏に尋ねる。最初は張り切っていた二人だが、なんのためらいもなく答える。「明日カルカッタへ立とう。」異議なしである。我々は宗教家タイプではないのだ。旅をする事が我々には一番合っているのだ。

さらばカルカッタ!!さらばインド!!さらば中近東!!

所は変わってカルカッタ。とにかくきたない街である。「カルカッタの人口の半分以上は乞食である。」ドイツ人のヒッピーの言っていたコトバである。実際にそうかも知れぬ。

朝早くには、街のいたる所に人が寝ている。その中のいくつかはすでに息絶えているのである。この街にナクサライトなる極左集団が勢力を持つのも不思議ではない。かえってナクサライトが全インド的に勢力を持たないのが不思議なくらいである。

インドには中産階級がないと言われる。すなわち、有産階級と無産階級のみなのだ。インドの人口の何パーセント、いやコンマ何パーセントしかない有産階級の連中は、我々

には想像もつかないほどの大金持ちなのだ。それに続くのは、まあ食うに困らない程度の人々（我々の考える中産階級とは異質）である。しかし、人口の大半は、貧困のどん底にある人々である。通常の国家形体からは判断しがたい矛盾が存在している。最後の章の最後として、ボクなりにインドという国を見て批判したいと思う。

先に触れた如く、インドでは貧富の差が激しすぎる。宮殿のような邸宅に住み、山海の珍味を食する者もあれば、路上に寝起きし、食うにも困まり、あげくのはては飢死する者もある。上流の人間は下層の人民を考えない。

ボクの感じたところでは、上流の人間、教育を受けた人間は一樣にバカである。ある大學生が言うには「インドは日本に次ぐアジア第二の工業国である。しかし、インドには日本よりも多くの資源があり、多くの労働力がある。よって近い将来、インドは日本を抜き、アジア第一の工業国となるであろう。」確かに客観的事実だ。しかし、多くの資源、多くの労働力を生かす人材がインドにはないではないか。

また、彼等はヨーロッパ系の民族であることに異常な誇りを持ち、我々日本人フリークをさげすむ。カルカッタの街を歩いていた時だ、数人の大学生風の男に「イエロー・ヒッピー」と言われた。彼等の劣等感はこのような形でしか乗り越えられないのだろうか。仮にも教育を受けた人間が、このような形でしか優越性を表現できないのだろうか。このような人間がインドの将来を明るくすることは不可能だ。

そもそもネールという男がよくなかった。あの男は英語しか話せなかったというではないか。そんな人間に、英語を話せない、ヒンディー語とかベンガリ語とかしか話せない下層の人民の心が理解できるであろうか。

インド大使館、いやインド政府（話がデカくなる）から抗議があるといけないのでこのへんでインド批判はやめておこう。

さてそろそろ日本へ帰るか。帰りの切符の手配をと思い、ビルマ航空、タイ航空、キャセイ航空とまわる。この三社には学割が効くのだ。しかし、タイ航空、ビルマ航空の二社は、長髪を理由に切符を売ってくれない。バンコクのイミグレーションはヒッピーを入学させないそうだ。 Fuck Bangkok Immigration !!

ヘアピンを使い髪をアップにして、耳を出しキャセイ航空へ行く。ジロツと一瞥されたがOK。イスタンプールで作ったインチキくさいインターナショナル・スチューデントカードが役に立った。

カルカッタ滞在三日目の午後となる。シタールをかかえ、キャセイ航空のオフィスへと来る。やがてオンボロの空港バスがやって来る。渡辺・志賀両氏に別れを告げる。

いい奴等だった。ボクが他人に与える最高の称号は「いい奴」である。二人とも実にいい奴だった。

二時間近くかかるダムダム空港への道すがら、今回の旅であった人々を思い出す。イギ

リス人ジョン、シンガポールのミン、スイス人のピーターとマティス、イタリア人ジャンニ、カナダ人のステイブ、日本人の渡辺氏と志賀君。みんないい奴だった。みんないい奴だった。忘れ得ぬ人々。

さらば我よき相棒達!!さらばカルカッタ!!さらばインド!!さらば中近東。さらば

!!さらば!!